

追悼・小林恵美子

# 薄萌黄色の手紙

——亡くなった恵美子さんのこと——

窪島 誠一郎

「恵美子さんが亡くなられた。本当は「お寺の奥様」とか「大黒さん」とかおよびすべきなのかもしれないのだが、私たちにとってはやっぱり恵美子さんは「恵美子さん」だった。

身体の変調を訴えられて入院されたのは一昨年の夏だったか。たまたま何日後かに予定されていた浄蓮寺恒例の「無明塾」の打ち合わせで住職と長野市内で食事をする約束をしていた夜、恵美子さんは私の泊まっていたホテルに「急に住職が体調を崩しました」と約束の変更を告げにこられたのだが、そのときの様子があまりに元気なくみえたので、失礼ながら私は住職のことよりも恵美子さんの身体のほうが心配になったものだった。案の定、それからまもなく恵美子さんは緊急入院され、一年半におよぶ重篤な病との闘いをはじめられたのである。

恵美子さんが入退院を繰り返すようになってからも、住職は時々私の美術館の集まりなどに顔を出してくださっていたが、私は何となく恵美子さんの詳しい病状をおききする勇気があってもくじけないうるが

気がなかった。

「その後、いかがですか？」

私が言葉少なくなつたずねると

「まあまあ、今のところは何とか」

住職も言葉少なくなつた答えられるだけだった。

そんな住職の様子から、私は恵美子さんの容態があまり思わしくないことを薄々察知していた。そして、檀家やお寺の関係者に心労をかけたくないために、住職がなるべく恵美子さんの病を口外しないようにしていることがわかって、お寺という職業を少し恨めしく思った。

そんな恵美子さんから、私の東京の妻子のもとに一通の手紙がとどいたのは、昨年の九月末のことだった。今年三十五歳になる私の長女が、やはり恵美子さんと同じ婦人科の病の手術をうけることになったのを住職からきいて、恵美子さんが病床からお見舞いの手紙をくださったのだった。

「お嬢さんは大丈夫です」どんなことがあってもくじけないうるが

て「手術の成功をいのつています」——薄萌黄色の野線の入った便箋に、いつもの恵美子さんの美しいペン文字で綴られた文章は、もうそれどころではなかったはずのご自分の病苦については一言もふれられていなかった。東京から妻が送ってきた手紙をまえにして、私はただ涙があふれた。



窪島さんご一家と、恵美子(後列中央)＝昨年12月、都内のホテル

辛い、長女は手術の結果早期の良性腫瘍ということがわかり、一週間ほどの入院でケロリと元通りの身体になったのだが、退院の日まで恵美子さんの手紙をベッドの横にピンでとめていたそう。

「私が助かったのは恵美子さんの手紙があったからね」

ふだんは勝ち気な娘がしおらしく

そういうので「今度は恵美子さんのほうが良くなる番だ。みんなでお祈りしよう」私はそんな言葉を返したのだった。

「無明塾」の日、中野孝次先生や秋山駿先生、ヴァイオリニストの天満敦子さんのもてなしに甲斐甲斐しく立ち働かれていた恵美子さん。庫裡のすみでくつろぐ世話人の方々にお茶を淹れていた恵美子さん。まだ淡雪のこの境内を一人で黙々と掃除していた恵美子さん。たまに私と住職とが長野で夜遊びする日など、イヤな顔一つせず運転手役をひきうけてくれた恵美子さん。

「お寺の裏方はご苦労が多いんですよ」  
「住職とお母さんが助けてくれますから、私は案外ラクなんですよ」  
その笑顔のさわやかだったこと。薄萌黄色の手紙とともに、恵美子さんのやさしい頬笑みは忘れられない思い出になった。

どうか安らかに、恵美子さん。  
〔信濃デッサン館〕無言館館主